

11 明治の軍医部出仕官について

黒澤嘉幸

明治のはじめ、兵部省は世界のすう勢にならって、西洋式の軍制による陸軍を建設しようと考えた。

しかしながら、組織を創設するためには、組織の中核となる要員を確保しなければならない。陸軍の場合その中核になる要員は士官である。そこで兵部省は兵学寮を設け士官の養成に乗り出した。

一方、陸軍の創設は国の内外の情勢から急を要したので、政府は維新の時官軍側について藩から主に士官要員を求めたが、この方法では弊害も少なくなかったので、計画中の士官学校などによって士官が養成されるまでの間、広く一般から陸軍志望者を募り、試験によって士官の素質を持つ者を選考し、部内に勤務させて士官に必要な技術を習得させ、さらに試験によって士官に任用する

制度を採用した。

陸軍はこのような形式で採用され、必要な技術を習得中の人達を出仕官と称し、文官と区別していた。当時の陸軍の諸隊、諸機関の定員表を見ると、出仕官の定員数は示されていないので、出仕官は員外官の取扱いを受けていたと思われるのである。

明治四年松本良順は兵部省に招かれて軍医寮の創設を託されたが、軍医療の骨格となるものは軍医である。そこで彼は軍医療で必要とする軍医は士官であること、西洋医学を習得した医師であることを兵部省の首脳部に理解させ、軍医の募集に着手した。

しかし、西洋医学を習得し、かつ士官として組織の管理を行う能力を持つ人材は当時国内では百名にも満たない状態であったから、その募集はきわめて困難であった。召募の対象としては、まず明治四年に兵部省の指示で宮城警備のため編成された親兵の一番大隊から十番大隊の隊付医師、次いで旧募兵隊、和歌山、名古屋、新発田、大垣等からなる諸兵十箇大隊の隊付医師中軍医志望の者で、夫々に西洋医学の試験問題を課して採用試験を実施

したが、受験者中合格したものはきわめて少なかった。

次に軍医寮は文部省から西洋医学習得者を割譲して貰えるよう交渉した。当時文部省は日本の医学教育整備のため多数の西洋医学習得者を抱えていたからである。しかし、文部省もまだ草創の時代であり、兵部省の要請にこたえることは出来なかった。

そこで松本良順は父佐藤泰然の開いた佐倉順天堂の門人の中から林紀、桑田衡平、横井信之、草刈義哉、西友輔などを、また、彼が幕府医学所の長をしていた頃の門人名倉知文、三浦煥などを招いて軍医寮を構築した。

しかしながら、その員数では陸軍省の計画する四管区鎮台制の軍医定員を満すことは到底できなかった。

そのため軍医寮は兵部省の採用した出仕官にならって軍医寮出仕官を採用することになり、早速西洋医学の心得があつて陸軍軍医を志望する者を募り、採用試験を行つて軍医寮出仕官に採用した。

これらの出仕官は毎日の勤務を通じて臨床技術や衛生学を習得すると共に、毎年基礎医学および臨床技術に関する試験を受け、任官、昇任昇格の評価を受けたのであ

る。

職員録によれば軍医寮出仕官の員数は明治五年一九名、明治六年一〇一名であつた。しかしながら、明治六年五月軍医寮が廃止されたため、軍医寮出仕官は兵科出仕官と同様に陸軍省出仕官になり、明治七年以降の職員録には両者の区別がなく収載されるようになった。そのため、軍医部の出仕官の識別はきわめて困難になつたのである。

今回は明治七年以降の軍医部出仕官について検討を行い、出仕官制度の実態を明らかにした。